

9月末から10月上旬まで10日間ほどヨーロッパに行っていました。今回は、ドイツのハノーファー市でのドイツ音楽学学会に出席するために渡欧しましたが、ウィーンにも研究のために数日間滞在しました。ウィーンでは、久しぶりに、ハイリゲンシュタットのベートーヴェンの住居を訪問して来ました。そこは現在記念館になっています。

ベートーヴェンは、1802年、31歳の時に二人の弟に宛てて、遺書を書いたことは有名です。当時のベートーヴェンは、難聴が隠しきれないほどに悪化していながら、人に知られたくないという思いが強く、自分で気がつかないうちに大声で話したり、聞こえたふりをして、トンチンカンな受け答えをするなど、ウィーンでは「変人」扱いされ始めていました。「本当は人々と親しく交流し、社交的でありたかった。」と遺書にあるように、ベートーヴェンは孤独感を強めていったことがわかります。本当は、カフェでパイプをくゆらしながら、友人たちと語り合うのが好きだったのに、難聴のせいで人間的に誤解されていることが、たいへん辛かったのだと思います。

しかし、遺書を書く半年ほど前には、ピアノソナタ作品31の3曲を作曲しています。その中の1曲が、有名な“テンペスト（嵐）”で、幻想的に曲が始まるなど、今までのピアノソナタの形式とは異なり、斬新な作品になっています。これらの作品を書いているとき、ベートーヴェンは、友人のヴァイオリニストに「私は今までの仕事に満足していない。これからは新しい道を歩むのだ。」という手紙を書いており、前向きで、旺盛な創作意欲を持っていました。そこから半年もたたないうちに、ベートーヴェンは、ウィーンの郊外、ハイリゲンシュタットの住居で、遺書を書きます。その住居は、天井が低く、4畳くらいの小さな部屋が2つしかない、こじんまりとした家でした。小さい窓からは、中庭の木々のこずえだけが見え、視界があまり広いとはいえず、心が塞いでしまう環境に思えました。現代でさえ、ウィーン市内とはいえず、ウィーンの森の中に位置し、閑静な場所でしたので、当時は、世間から遠くはなれたところに来てしまったという思いから、遺書を書いたのではないかと思われました。この遺書は、結局、投函されることはなく、不滅の恋人の手紙と同様に、ベートーヴェンの心の叫びを書くことによって、自らの心の安定を得ていたのではないかとされています。

この遺書を書いた1年後、最新のエラール製のピアノを贈られたベートーヴェンは、俄然、元気を取り戻し、“ワルトシュタイン”や“熱情”といった、傑作をどんどん生み出していきます。遺書を書いた後から、10年に渡って、“英雄”、“運命”などの交響曲を含む、名曲を次々と作曲し、「傑作の森」といわれる時期に入っていきます。

ベートーヴェンの生き方は、難聴や失恋などの苦しみに直面した時、遺書や熱烈な恋文を書くことによって、その苦しみから抜け出し、その苦しみを力として、音楽の創作に向かったといえるのではないのでしょうか。最新のピアノを贈られて、遺書を書いたことなど忘れて音楽に没頭している姿を想像すると、ベートーヴェンに親しみを感じませんか？